

## 千葉県におけるサギ類の生息状況調査<sup>1</sup>

日本野鳥の会千葉県支部<sup>2</sup>

### はじめに

本報告は、千葉県内におけるサギ類の生息状況、特にコロニーとねぐらの現状について調査した結果をまとめたものである。千葉県では、1980年に館山市でサギ類の大規模な有害駆除が行われて問題となり、現在でも、食害や悪臭、フン害などのため駆除問題が発生している。本調査は、千葉県の委託により日本野鳥の会千葉県支部が実施したものであり、県内のサギ類の生息状況を把握し、今後予想される問題に対して人間との共存を計り、サギ類を保護するための資料を得ることを目的としている。調査報告はすでに千葉県に提出しており、本文はそれをもとに書き直したものである。

### 調査の経緯

1980年8月、千葉県館山市の城山コロニーにて、サギ類1,000羽の大量射殺が行われ、マスコミ等にも大きく扱われる問題が起きた。しかしそれ以前にも成田市や佐原市のコロニーで、射殺や巣、卵落としが行われた経緯があり、行政側の対処の悪さもさることながら、我々保護側も県内コロニーの基礎資料が全くない状況であった。そこで県よりの委託を機会に、県内全域のコロニーを把握するべく調査を開始した。

### 調査方法

1/2.5万地図を基本メッシュとして、各調査員が7~8メッシュを担当し、コロニーおよびねぐらの所在地探しを行った。自動車を使いながら水田、湿地、河川等サギ類の生息する地域を回り、その飛去方向に注目してコロニーを探すのが、調査の第一段階であった。

コロニーおよびねぐら発見後は、成鳥個体数のカウント、植生、地形、面積、主に採餌する餌場、周辺住民の意見の聞き取り等を行った。また、冬ねぐらは、繁殖コロニーをそのままねぐらとして使用しているか、その他、大規模な冬ねぐらが存在しているかを中心に、調査を行った。

### 調査結果

---

1982年10月13日受理。

1. 執筆者：小島久佳・〒277 柏市東中新宿1-7-12.
2. 〒275 習志野市谷津7-7-26 アカシアハイツ2-404 朝倉南海雄方.

### 1. コロニーおよびねぐらの分布

図1は、1981年6～8月にかけて発見された、コロニー、夏ねぐらと1981年12月～1982年2月の間に発見された冬ねぐらの分布図である。この結果、千葉県下にコロニー15ヶ所、隣接する茨城県側に2ヶ所、夏ねぐら8ヶ所の、計25ヶ所が存在することがわかった。

図1を見て明らかなように、コロニーは、利根川および江戸川流域に9ヶ所、九十九里北部の水田地帯に3ヶ所と、コロニー全体の8割が県北部に集中している。その他のコロニーは、県中央部に2ヶ所、南部に2ヶ所となっている。また、夏ねぐらは、県中央部以南に8ヶ所分散している。特に1980年に、サギ類の大量駆除が行われた館山地区では、問題になった城山コロニーのサギの数が減少し、周辺に夏ねぐらとして分散した様子がかがえる。

冬期に発見されたねぐらは7ヶ所のみであり、コロニーおよび夏ねぐらを引き続き冬ねぐらとして使用していたのは、3ヶ所のみであった。その他、10羽未満の冬ねぐらの報告もいくつか受けたが、恐らく冬期は小規模な群れとなって、県下各地に分散して越冬するものと思われる。

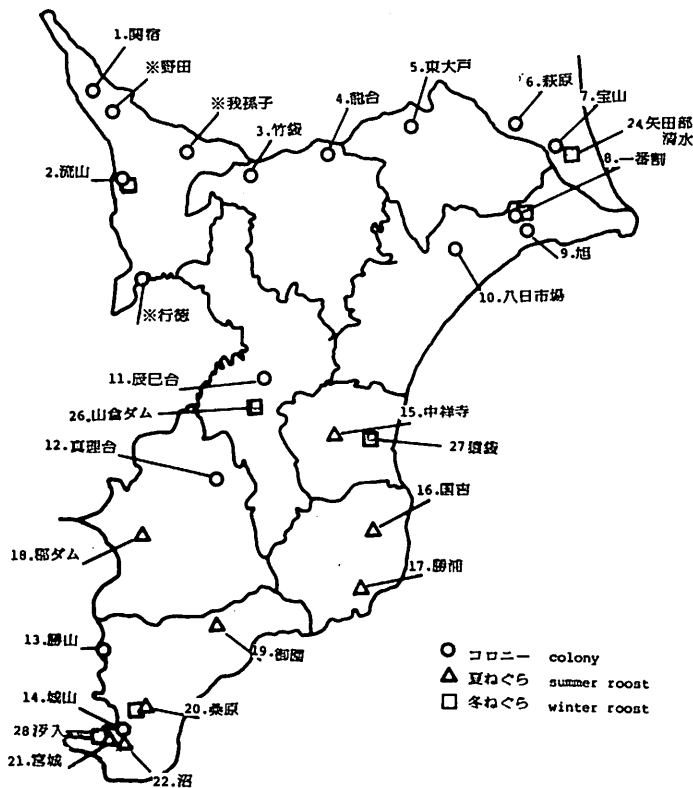


図1. サギ類夏期コロニー、夏ねぐらおよび冬ねぐら分布図. 1981年.

地名は通称、※は繁殖期後コロニーの存在が聞き込み等で明らかになった所.

Distribution of the colonies, summer roosts and winter roosts of herons in Chiba Pref., 1981-1982.

2. コロニーおよびねぐらの規模

図2はコロニーおよびねぐらでカウントした個体数(全種の合計数)を6つのクラスに分け、ヒストグラムにしたものである。コロニーおよびねぐらが発見した時には繁殖がほぼ終了し、分散、渡りの時期にかかっていたため、個体数のカウント結果は、必ずしも繁殖期の成鳥の個体数とはいえない。(すなわち、8月に入ると巣立後の幼鳥や渡りの群れの混入があり、又昼間のカウントより夕刻の帰峙時のカウントの方がぐんと数が増加する等)。この点を考慮したうえで、得られた結果をみると、コロニーおよびねぐらの規模は、100~500羽のクラスが非常に多く、得られたデータ29例のうち72%を占めた。

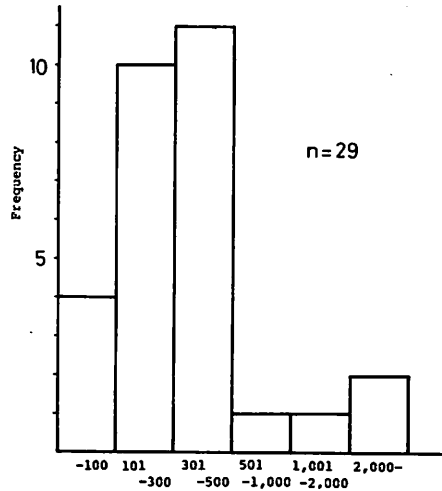


図2. コロニーおよびねぐらの規模.  
Size of the colonies and the roosts of herons.

3. 種類構成

図3はコロニー、夏ねぐらおよび冬ねぐらについて、種別の個体数を百分率で示したものである。コロニーおよび夏ねぐらの構成種についてみると、ダイサギ、チュウサギの構成比率が各々8%となっていることが注目される。

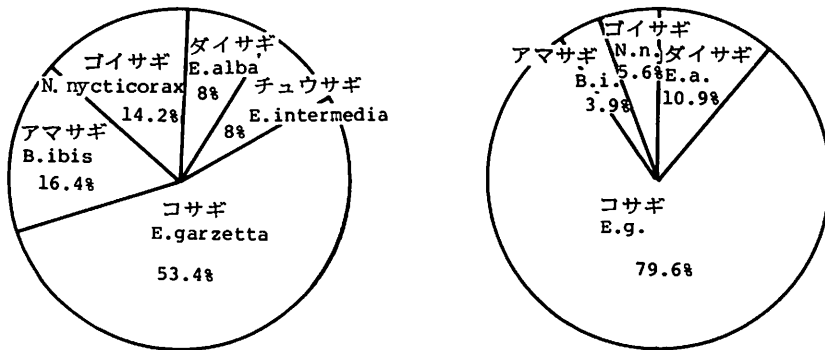


図3. コロニー、夏ねぐら(左)および冬ねぐら(右)の種類構成.  
Species structure of the colonies, summer roosts (left), and the winter roosts (right).

4. コロニーおよびねぐらの環境

1) 面積

図4-1はコロニーおよびねぐらについて面積データのあるもの25例についてランク別に百分率を求めたものである。この結果1,001 m<sup>2</sup>~3,000 m<sup>2</sup>の面積のものが最も多く全体の44%を占めた。また、501 m<sup>2</sup>~1,000 m<sup>2</sup>のものが次ぎ、両者を合わせると全体の68%が

この広さ内にあることがわかる。その他の広さのものは数がぐんと減少し、各々1~2例であった。

2) 林相および地形

図4-2~4はそれぞれ林相、天然林と人工林および地形について、調査記録のあった25例について百分率を求めたものである。林相別で見ると、針葉樹林が全体の54%を占め、続く針広混交林を含めると8割近くを占める。また、人工造林および二次林にコロニーおよびねぐらが形成される傾向がうかがわれる。地形別では平坦地または緩斜面での記録が多かった。

5. 餌場との関係

図5は、主な餌場のわかっている場所について集計し、百分率を求めたものである。主な餌場は水田が最も多く42%を占め、次いで河川、湿地、湖沼の順となっている。このことからわかるように、千葉県下のサギ類のコロニーは、広々とした水田地帯、河川を中心とした餌場との関連で存在していることが充分考えられる。このことは、県中央部の山

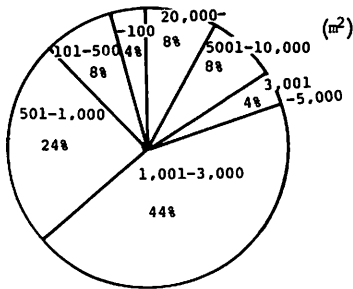


図4-1. サギ類コロニー、ねぐらの面積。  
Areas of the colonies and roosts.



図4-2. 林相. Forest types of the colonies and the roosts.

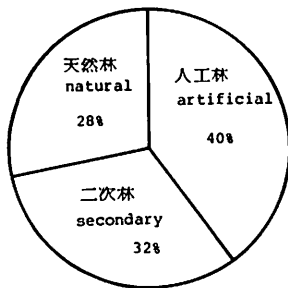


図4-3. 天然林、人工林および二次林の割合。  
Percentage of natural, artificial and secondary forests in all of the colonies and roosts.

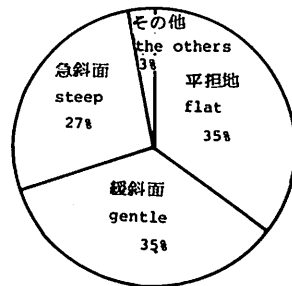


図4-4. コロニー、ねぐらのある地形。  
Landslope at the colonies and roosts.

地帯ではコロニーが発見されず、2～3のねぐらがあっただけということからも裏付けできるであろう。ただし、館山地区、勝山の場合は、養魚場という餌場が大きな要因となっていることは確かなようである。

### 考 察

以上、コロニーおよび夏ねぐら22例、冬ねぐら7例のなかで、データとして得られたものについてまとめてみたが、ここではまず、生息個体数について考えてみよう。ダイサギ、チュウサギは全国的にみて極めて数が少ない種と言われてきた。今回の調査結果によると両者合わせて1,400羽弱の

個体が確認されているが、その内約半数以上は隣接する茨城県側の萩原コロニーでの数字である。それを除くと県内においても数の少ない種類であり、今後の保護対策が必要であろう。また、ゴイサギの数が予想外に低かったことも注目される。ゴイサギは夜活動する個体が多く、コロニーおよびねぐら帰巢時のカウントから外れることも充分考えられるが、冬期には狩猟鳥として狩猟されていることもあり、県内ではコサギに比べると数の数少ない種と言えよう。

次に、サギ類各種の生息時期について考えてみよう。冬ねぐらについてのデータは少ないが、コサギとゴイサギが留鳥、ダイサギとアマサギが漂鳥、チュウサギが夏鳥と考えられよう。特に県内でアマサギが越冬していることは注目すべきことである。ダイサギの越冬個体のなかには明らかに大型のもの（北方亜種）が混入しているとの報告があり、アマサギもおそらく千葉県以北で繁殖した個体が越冬するため両者を漂鳥と考えた。

次にコロニーおよびねぐらの現状を考えてみよう。分布図を見ても明らかのように、コロニーおよびねぐらの大部分が海岸部から河川流域の平野部に集中し、山間部に位置するものは極めて少ない。したがって、これらの地域では自然林が極めて少ないため、二次林や人工造林の針葉樹林や針広混交林である場合が多い（図4-2～4）。これらの地域では、水田、宅地等人間との生活接点が多いと考えられる。サギ類は集団で生息する習性と、魚類を中心とした動物性の食物をとる習性があるため、コロニーおよびねぐらが人間との生活域に近いと、悪臭、騒音、糞害、食害等のトラブルの原因となる。特にこれらのトラブルは、ヒナがかえり暑さも加わってくる6月～8月初旬に多く発生すると考えられる。

このため、コロニーやねぐら周辺の住民の要請により、行政側で有害駆除（射殺、巢落し、卵の破壊）を許可することが続いてきた。しかし、駆除により生息数を減少させる方法は、根本的な問題の解決にならないばかりか、ダイサギ、チュウサギという極めて個体数の少ない種を絶滅させる危険性も含んでいることを考えねばならないであろう。

サギ類が冬ねぐらを離れ、コロニーに集まりだすのは、早いもので2月中旬頃からである。そして、アマサギ、チュウサギ等の渡りの群れが到着する4月中旬～5月初旬には巢

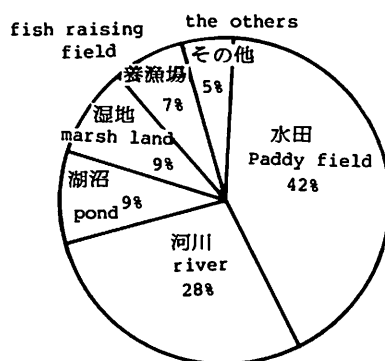


図5. コロニーおよびねぐら周辺の主な採食場所。  
The main feeding sites around the colonies and roosts.

造りが開始される。したがって、トラブルの起きているコロニーを分散させるには、少なくとも巢材を運びはじめる時点までに対応策を講じる必要がある。また、何よりも大切なことは、住民側、行政側、保護側が対策を事前に話し合い、相互の信頼関係に基づいて行動を行うことであろう。

### 要 約

千葉県に生息するサギ類に関する調査を、1981年7月から1982年3月まで行った。この結果、県内で確認したコロニーの数は15ヶ所、夏ねぐらは8ヶ所、冬ねぐらは7ヶ所であった。また、コロニーおよびねぐらは、県北部の河川、水田地帯に多く分布し、その規模は、個体数が100~500羽の範囲にあるものが72%、面積が1,001~3,000 m<sup>2</sup>の範囲にあるものが42%でそれぞれ最も多かった。さらにこれらは、林相では針葉樹林、地形では平坦地と緩斜面に多くみられた。

サギ類保護に関して、個体数の少ないダイサギとチュウサギを保護すること、住民との接触が多い地域では、住民、行政、保護団体がよく話し合い、根本的な解決策を講じることを提案した。

### The Survey of Heronries in Chiba Prefecture

#### Chiba-ken Chapter, Wild Bird Society of Japan

The survey of the heron colonies and roosts was conducted from June 1981 to March 1982 in Chiba Prefecture. The numbers of colonies, summer roosts and winter roosts found in Chiba Prefecture were 15, 8, and 7 respectively. More colonies and roosts were found in the northern part of Chiba Prefecture than in the southern part. Most of the colonies and roosts were composed of 100-500 birds (72%), and occupied areas of 1000-3000m<sup>2</sup> (45%) in coniferous forests (54%), on flat (35%) or easy slopes (35%). There were few Great Egrets (Egretta alba) and Intermediate Egrets (E. intermedia). The protection of these species is urgent.

c/o Nakao Asakura, Akashia-Haitsu 2-404, 7-7-26 Yatsu, Narashino-shi 275